

讃岐漆芸における素材と技術の革新 —磯井如真の官展出品作を中心に—

佐々木千嘉（金沢美術工芸大学）

本発表では、今日も有数の漆器産地として知られる香川県の漆工芸を先導してきた漆芸家、磯井如真（1883－1964）の業績に焦点を当てる。特に官展出品作に見られる彼独自の技法及び新しい感性によってもたらされた、讃岐漆芸における素材と技術の革新について考察する。

一般的に、近代漆工史における磯井如真の足跡は、昭和 31 年に重要無形文化財保持者に認定されて以降の、蒔髷による作品が扱われ、語られることが多い。一方で、磯井が重要無形文化財保持者となる以前の農展、商工展、帝展、新文展、日展等の展覧会に出品していた頃の作品に焦点を当てた研究が少ないのが現状である。彼の官展出品作には、特色ある新技法や、素材を生かした卓抜した意匠表現がなされていた。彫漆を併用した作品や、堆漆板を象嵌する手法を用いた作品等、彼の幅広い技術と造形感覚への分析を抜きにして、讃岐漆芸の歴史を考察することはできないのである。

江戸時代後期、玉楮象谷（1806－1869）が創始した蒔髷、彫漆、存清の技法を特徴とする讃岐漆芸は彼の死後、弟の藤川黒斎（1807－1885）や象谷の子である玉楮蔵黒（1831－1880）、玉楮拳石（1833－1882）らが中心となり、継承されていった。しかし彼らは旧法を固守し過ぎるあまり、新機軸を打ち出せず、讃岐漆芸は全体的に衰えていると内国勸業博覧会において痛烈に批判されるに至った。新たな革新を迫られていた讃岐漆芸に変化をもたらされたのは、香川県立工芸学校を卒業後、山中商会に就職した磯井如真が明治 42 年、香川県に帰郷し、作家活動を開始して以降のことである。

磯井は、大正 2、3 年頃、従来の線彫りではなく、点で彫る「点彫り蒔髷」を創案し、奥行きと立体感のある絵画的表現を可能にしたことで、蒔髷の新たな表現を開拓した。昭和 5 年の第 17 回商工展で二等賞を受賞した《草花文 乾漆花瓶》や、昭和 6 年の第 12 回帝展に出品した《彫漆草花文 鼓箱》は、点彫り蒔髷と彫漆を併用した作品となっている。さらに、黒漆及び色漆を 150 回塗り重ねた堆漆板を剥ぎ合わせた作品《乾漆花瓶》は、昭和 12 年に開催されたパリ万国博覧会に出品され、大賞に輝いた。磯井の官展出品作の中でも、昭和 16 年の第 4 回新文展に出品した《双色紙管 喜鵲之図》は、点彫り蒔髷、彫漆、堆漆板の象嵌といった彼独自の多彩な漆芸技術の集大成となった注目すべき作品である。

今日の讃岐漆芸は、玉楮象谷が創始した蒔髷、彫漆、存清の技法による伝承だけでは到底成し得られなかったものである。漆芸家が個人作家としての意識に目覚め、独自の表現を追求するために工夫を重ねたことで、个性的かつ創造的な作品が生み出された。近代讃岐漆芸における素材と技術の革新の幕開けとなったのである。